

明るい社会づくり推進 実践体験文の入賞作品

東三河地区協議会

東愛知新聞社賞

3/5
3/5

きた。なせなら、海がきれいな方がスッキリするからだ。

僕は、小さい頃からよく休みの日に、父と一緒に表浜海岸へ遊びに行っていた。なせかというより、そこできれいな貝殻や軽石、シーグラスなどを探して拾うのが好きだったからだ。それに加えて漂着したゴミを見つけたら、僕は、「ゴミ拾いをしよう。」と父を誘って、「ゴミ拾いを積極的にするってのが好

ら、風や川、海流などから運ばれてくるゴミも多かった。僕は調べたのは、父は今、自治会の仕事で年に6回、地域のボランティアの人達と一緒に海岸清掃をしている。細谷町、東細谷町、

時間に表浜海岸について新聞をつくることになった。僕が調べたのは、表浜海岸に流れる海洋ゴミについて調べた。それはなせかというより、前に述べた小学4年生の時の夏休みに自由研究で、

小さいことから コツコツと

豊橋市立五並中学校2年 村田大和

西山町などの各町の自治会とボランティアで分別したゴミの中には、大量のライターやタバタスプレー缶や電球、中国や韓国、マレーシア産のペットボトルなどもあった。これらを見て、父は、「こうしてみると、色んな国のゴミがあるんだな。」と言った。

「海がめの卵のこと調べる。」
「アカウミガメの生態か？」
「海がめが多く、流れつと海がめの多く、流れつと海がめについて書く人はあまりいなかった。海洋ゴミとして、流れてくるもの多くは、プラスチックで海に流れてしまつと、マイクロプラスチックとなり、有害化学物質の運び屋となつて、海をだんだん汚染してしまふ。海洋ゴミの中には、陸のゴミもあり、風や川などによって海に運ばれる。父と海に流れる川へ探索した時には、サワガニやカワエビ、ヨシノボリ、ドンゴの稚魚がいた。辺りを見ると、やはりゴミもあった。

「生物はたくさんいるけど、ゴミもたくさんあるね。」
「僕は言った。一本当たった。」
「父も残念そうに言った。少し片づけるか。」
「そうだね。」
「僕は即答した。ゴミの中には、レンガの破片やボロボロのブロックやペットボトルなどがあつたことを思い出した。海洋ゴミは、海の生き物に悪影響をもたらしてしまふ。例えば、ネットやケースにアカウミガメが入つてしまふ、動けなくなつたり、魚がマイクロプラスチックを餌とまちがえて食べてしまふ、炎症反応、摂食障害などが起こつてしまふなど、大きな被害を出している。やがてそれは、人間の方にまで悪影響を起し、化学物質に汚染された魚を食べると、がんの発生や代謝性疾患の発症を引き起こす可能性があるらしい。」
「けっこうヤバいんだな。」
と友達が言った。
「俺、魚けつこう食べてるけど大丈夫なのかな？」
ともう1人の友達が言った。
「でも、それって嘘っぽくない？」
と言う友達もいた。まだ、はつきりとは分かつていないため賛否両論だった。僕は、好きで始めた海岸でのゴミ拾いは、1人だけの活動ではなく、地域の1人1人が協力してやっていくものだと思つた。今現在SDGs(エスディーシーズ)、持続可能な社会づくりというものが言われている、今までしてきた人間の進んできたやり方を改めようとする動きがある。僕の家でも、エコバッグの使用、ゴミの分別資源回収に協力するなどできることをやってきた。でも、1人だけの力では、明るい社会をつくることはできない。日本にいる全員がやらなければ1歩にもならない。だけど、それを自分が呼びかける勇気がないので、1人1人が気づかなければならない。そのためは、まず、小さいことから始めてコツコツとやっていきたいと僕は思つた。

と僕も言った。こうして国のあるゴミはあつたと確かに。」

「海がめのことを書こう学校では、総合学習のかな。」

「海がめのことを書こう学校では、総合学習のかな。」